

日本女子体育専門学校における二人のダンス教師

－高田せい子・石井小浪－

Two dance teachers at Nihon Joshi Taiiku Senmon Gakkou

－Seiko Takada・Konami Ishii－

村山茂代

Shigeyo MURAYAMA

Abstract

This study will explore dance instruction by two professional dancers, Seiko Takada (1895-1977) and Konami Ishii (1905-1969), at Nihon Joshi Taiiku Senmon Gakkou, a normal school of physical education founded by Tokuyo Nikaido (1880-1941).

Tokuyo believed that Western dance was good physical exercise for Japanese women to improve their physique. Therefore, she hired many excellent teachers from a wide range in dance. Among those teachers, Tokuyo had particularly great expectations for Seiko and Konami.

Seiko had studied ballet with Giovanni Vittorio Rossi (1867- ?) and performed in Western countries. She also taught ballet technique at Nihon Joshi Taiiku Senmon Gakkou.

Konami had studied dance with her brother-in-law, Baku Ishii (1886-1967), and performed in Western countries as well. She created dance pieces called “gakkou buyou” and taught them at Nihon Joshi Taiiku Senmon Gakkou. Her students loved these artistic dances and assimilated them into their teaching of underclassmen for many years.

Seiko and Konami taught dance at Nihon Joshi Taiiku Senmon Gakkou for 10 years; however, the Ministry of Education, influenced by militarism, decided to devise a new curriculum at that time. Therefore, they were pressured into resigning in 1941.

keywords : Seiko Takada, ballet technique, Konami Ishii, gakkou buyou

I. はじめに

日本女子体育専門学校（体専）の創設者二階堂トクヨ（1880-1941）のダンスについての考え方は、先の研究「二階堂トクヨとダンスーダンスの研究と指導についてー」（日本女子体育大学紀要34巻）に明らかにしたように、トクヨは留学時の経験やその後の研究にもとづき、ダンスは女子の体格の改善に効果的な運動であると考え、体専ではダンスを重視した指導方針をとってきた。

すなわち、学校体操教授要目に示された唱歌遊戯や行進遊戯の指導だけでなく、舞踊¹⁾、バレエ、体育ダンス、リトミックなど多種類によるダンスを指導した。しかも、指導する教師は、ダンスの各分野から一流の教師を採用した。なかでも高田せい子（1895-1977）と石井小浪（1905-1969）はトクヨが最も信頼し、二人の指導に期待を寄せていたと思われる。毎年4月に文部

日本女子体育大学（非常勤職員）

省へ報告した「教員調」（日本女子体育大学所蔵）によると、二人のダンス教師は昭和7年4月より昭和17年5月までの約10年間在任していた。

二人の舞踊家としてのキャリアを概観すると、せい子（本名：中村せい）は石川県金沢市に生まれ、明治41年石川県立高等女学校に入学。その前年にトクヨは高知県師範学校に転動しているのでトクヨの教え子ではない。明治45年東京音楽学校（現・東京藝術大学）に入学するが、大正3年には先輩の原信子²⁾の影響から帝劇洋劇部の学生に転身、原せい子と名乗りバレエ教師ローシー（Giovanni Vittorio Rossi, 1867- ? ）³⁾の指導をうける。そして、同じく洋劇部の学生であった高田雅夫（本名：中村輝義, 1895-1929）と知り合う。結婚して二人は、大正11年9月アメリカからヨーロッパでの公演活動のために出発した。大正13年9月に帰朝、洋行帰りの新進舞踊家として認められた。大正14年東京新宿区に高田舞踊研究所を新築。多忙な日々を過ごすうちに夫の雅夫は病に倒れ、昭和4年死亡する。

夫の遺志を継ぐために原せい子は高田せい子に改姓して舞踊家として歩むことを決心した。毎年春と秋に舞踊発表会を開催し、次第にわが国現代舞踊界のリーダー的存在となった。戦後は高田・山田舞踊団を結成した。日本女子体育短期大学体育科舞踊専攻主任教授を務めた故・江口隆哉は高田雅夫・原せい子時代の弟子である。その他多くの舞踊家を育てた。

一方、石井小浪（本名：高原千代）は東京台東区に生まれ、11歳より義兄石井漠（本名：石井忠純、1886-1967）について舞踊を学ぶ。漠の相手役として大正11年12月より大正14年4月にわたるヨーロッパからアメリカでの公演活動で舞踊家としての名声を確立。昭和4年舞踊家として独立することを考え、突然漠のもとを去る。突然の独立で、以後漠とは全くの没交渉となった。昭和5年東京目黒区自由が丘に研究所を設立、弟子の養成と作品の創作に専念した。舞踊家として華やかな表舞台で活躍することはなかったが、バレエの谷桃子、モダン・ダンスのアキコ・カンダや佐藤典子、またアメリカのマーサ・グラーム・ダンスカンパニーで活躍したユリコ・キクチなど多くの舞踊家を育てた。

以上に述べたように、二人の舞踊家は同じ頃に欧米での公演活動で舞踊家として成長した。また、昭和4年夫の死によりせい子は余儀なく舞踊家として独立、また小浪は自らの意志で独立して舞踊家としての道を歩んだ。二人とも同じ頃体専に迎えられ、そして同年に去っている。奇妙に人生の節目が一致した二人である。

本稿では二人の舞踊家が体専でどのようにダンスの指導を展開したかを明らかにする。また、二人の舞踊家を採用したトクヨの意図についても合わせて考えていく。最後に昭和17年に体専を解任されているが、その理由についても考察する。

研究資料として、せい子については日下四郎著『モダン・ダンス出航—高田せい子とともに—』（木耳社、昭和51年）および「高田せい子舞踊パンフレット」（熊澤事務所、昭和10年）を、また、小浪については石井小浪著『石井小浪学校舞踊』（小學館、昭和7年）および石井小浪著『石井小浪学校舞踊選集』（三友社、昭和12年）を使用する。また、日本女子体育大学所蔵の二人に関する資料も加えていく。

II. 高田せい子

—バレエ・テクニクの導入—

せい子は「私の舞踊は、申すまでもなく、バレエの技法に基礎を置いた西洋風の舞踊」⁴⁾であるという。せい子の「西洋風の舞踊」とは、帝劇でローシーから学んだクラシック・バレエのテクニクの上に、高田雅夫から受けた教えや、外遊中特にダンカン (Isadora Duncan, 1878-1927)⁵⁾の舞台をみるなど⁶⁾、新しいダンスの息吹にふれたことなどを総合して生み出された彼女の舞踊観にもとづいた舞踊であると考えられる。せい子の舞踊指導は、まず、「肢體矯正。脚、足、腕、手、指、上肢、首、肩、胴、等を、個々の訓練によって伸び伸びと発育させる。…同時に、肉體全體的均整を計り、重心を支えることを教練する」⁷⁾など、バレエ・テクニクによるダンサーの体づくりを念頭においていた。

トクヨは留学中ロンドンでパヴロワ (Anna Pavlova, 1891-1931)、ジュネー (Adeline Genée, 1878-1970)、ニジンスキー (Vaslav Fomich Nijinsky, 1890-1950) の舞台を鑑賞した。自身も有名なバレエ教師についてバレエを学び、バレエ・テクニクの修練は身体の発育や発達に効果的であることを認識した。

トクヨが体操塾 (体専の前身) を創設した時、バレエ・テクニクの導入を考えたであろうが、日本ではバレエ教師を見つけることはまだ困難であった。体操塾の卒業生原田鈴 (旧姓：清水、大正15年卒) は、塾でエリアナ・パヴロワ (Elena Nikolaevna Tumanskaya Pavlova, 1897-1941)⁸⁾ から「円心舞踏」を習ったと自著⁹⁾ に記している。原田は「毎日毎日鏡に向かっての足の開き、胴の屈折、腕の動き、指先きの曲線等」¹⁰⁾ のはげしい訓練をしたという。パヴロワの教えた円心舞踏とは、おそらくバレエのことであろうと判断する。また、パヴロワの指導は短期間であったことと思う。本格的なバレエ・テクニクの指導が始まるまでには、しばらく年数を必要とした。

先に述べたように、せい子が体専で教えるようになったのは、文部省への報告では昭和7年4月からであった。しかし、昭和7年3月の卒業アルバムには、すでにせい子と小浪の写真が掲載されているので、バレエ・テクニクの導入は昭和6年頃からであろう。

せい子の手書きによる昭和15年度 (4月15日～2月3日) の22回にわたる指導計画 (日本女子体育大学所蔵) によると、1年生には「基本ポジション」に時間



写真1 高田せい子

日本女子体育専門学校昭和7年3月卒業アルバムより（日本女子体育大学所蔵）



石井小浪

日本女子体育専門学校昭和7年3月卒業アルバムより（日本女子体育大学所蔵）

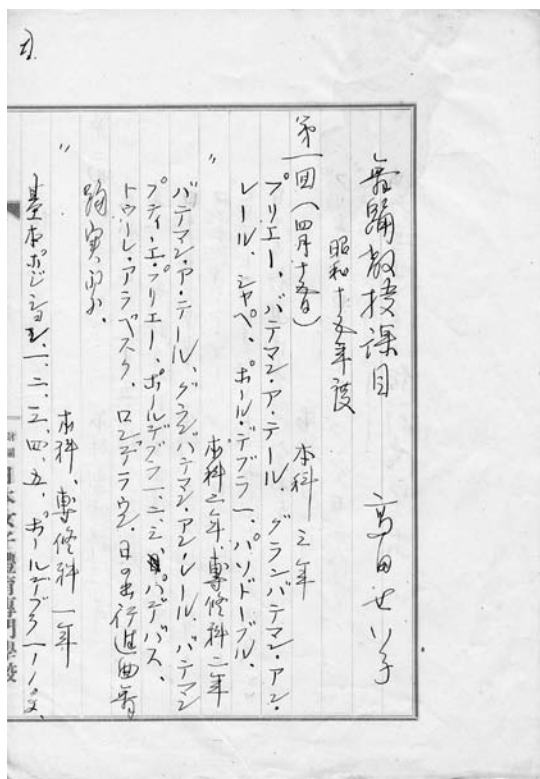


写真2 高田せい子の指導計画（日本女子体育大学所蔵）

をかけてから、次第に難易度の高いバレエ・エクササイズへと計画している。また、各学年には教材として「ウインナワルツ」「波濤を越えて」やこの時代の歌「日の出行進曲」「出征兵士を送る歌」「軍艦行進曲」「国民進軍歌」等による作品が配当されている¹¹⁾。

昭和15年に体専に在学した卒業生によると、「せい子先生の時間はバレエ・テクニクの指導に徹していた。教材として作品を習ったことはなかった。昭和15年頃は、若い男性のお弟子さんがせい子先生にかわって指導に当たることが多かった。私たちは肋木につかまってバレエのお稽古をした¹²⁾」と思い出を語った。

昭和初期の学校におけるダンスの指導は、ダンスの基本運動の指導よりも作品を教えることが中心であった。しかし、せい子は体専の学生には、舞踊作品を教えるより体づくりのためにバレエ・テクニクの指導がよいと考え、この指導に集中したものとする。

トクヨは昭和15年頃にはバレエ界のスター貝谷八百子（1921-1991）¹³⁾も採用してバレエ指導の充実をはかった。バレエを教えることは、当時の体操教師養成校では全く異例のことであった。

III. 石井小浪 —学校舞踊の導入—

小浪は学校で教えている唱歌遊戯や童謡舞踊¹⁴⁾について「すべて歌詞に振付けられたものであって、一つとして音楽からうける童心に觸れた童謡に接することが出来ない¹⁵⁾」と批判した。そして、研究所へ舞踊の稽古に来ている幼稚園から女学校に通う年代の弟子たちのために、また、舞踊研究のために小浪のもとに集まってくる音楽や体操の教師たちのために、学校舞踊¹⁶⁾の研究に取り組み、多くの作品を創作した。それらの作品は「子供たちの頭の中にかもされた感情をそのまま、肉體の動きに表現しようとする舞踊¹⁷⁾」であって、やがては「舞踊藝術への豫備教育として役立たせる¹⁸⁾」ことを考えていた。

この学校舞踊の指導は学芸会用に創られた作品と舞踊の基本練習の両面から行われた。舞踊の基本はリトミックやバレエから採用して小浪が考案したものであった。

かねてよりトクヨは、遊戯指導者の創った遊戯を批判していた。トクヨによれば「歌と云うものは言葉の精撰されたものであり、舞踏と云うのは手の舞ひ足の踏まひを美化したものである、精撰を経ない日常語に



写真3 肋木につかまってバレエのお稽古
日本女子体育専門学校昭和15年3月卒業アルバムより（日本女子体育大学所蔵）

ヤタラ節をつけるなどは以っての外、況して夫れにいい加減な動作を付けるなどは正氣の沙汰で無い¹⁹⁾という。体操塾創設以来、トクヨは自分に代わって納得のいくダンス作品を教えてくれる一流の教師を探していたのであろう。

トクヨは石井小浪の著書『石井小浪學校舞踊』（小學館、昭和7年3月）の序に「當校ダンリー會舞踊研究部では度々先生に御教授を願ってゐますが、いつも素晴らしい成績をあげて下さいますので、私は心から信頼申し上げて居ります²⁰⁾と書いている。体専におけるダンリー會舞踊研究部とはトクヨ関連の資料にはなく不明である。

光森信子（旧姓：奥野、昭和7年本科卒）の体専時代に使用したノート（日本女子体育大学所蔵）によると、見学記録（昭和6年1月17日）に、小浪の作品と思われる「兎のダンス」「庭の千草」「彼の町此の町」などのダンスのタイトルが列記されている。以上のことから、小浪は、確かに昭和6年からすでに体専で教えていたことがわかる。

体専では、全寮制が原則であった。夕食後は上級生が下級生にダンスを教える時間が設けられていた。この時間に教えるダンスは「伝統ダンス」と学生は呼び、上級生から下級生に引き継いだ作品が50程あった。昭和20年代後半の日本女子体育短期大学では、小浪の作品「オリエンタル・ダンス」「浜辺の歌」「月の砂漠」²¹⁾「庭の千草」も伝統ダンスとして教えていた。これらの作品は、流れるような叙情的な動きで構成された芸術的な作品であった。学生たちは、作品の振り付け者が



写真4 「月の砂漠」を踊るユリコ・キクチ（幼名：雨宮百合子）
石井小浪著『石井小浪學校舞踊選集』（三友社、昭和12年）より

誰であるか考えた者はいなかったであろう。しかし、これらの作品は学生たちの心をとらえ、上級生から下級生へ、また、体専の卒業生からその生徒へと広がっていった。

IV. 解任のとき — 体操科の統一 —

文部省は、昭和初年代頃までは舞踊家たちの活躍に敬意をはらい、文部省主催の遊戯講習会の講師を舞踊家に依頼することもあった。石井漢は、大正15年7月文部省主催の講習会に講師として任命され、全国から集まった二百数十名の教員に東京湯島小学校で一週間にわたって、舞踊の基本を教え講演もしたという²²⁾。また、舞踊家たちの作品を学芸会や運動会の演目として使用することも文部省は認めていた。しかし、第二次改正学校体操教授要目（昭和11年6月3日）が發布されてからは、要目による指導の徹底をはかった。すなわち、「唱歌遊戯及行進遊戯は學校で行ふ以上藝術のダンスとは全然その目的に於ては相容れないものである…飽く迄身體修練第一義で、情操の陶冶、感情の純化、それが美である無いは第二義でなければならない²³⁾と、学校では芸術のダンス（舞踊）を教えないことを明言した。

昭和12年7月支那事變の勃発から、日本は戦争体制がしかれた。すべての文化活動は官僚の統制下におかれ、舞踊家たちも自由な表現や活動が一層きびしく制限されるようになった。すなわち、舞台上演の作品はすべて検閲許可が必要となり、内容・表題・配役までも警視庁は厳しく干渉したという²⁴⁾。

学校体育においても体操科から体練科へと変革しようとしていた。トクヨはこれからの体操科をどのように考えていたのだろうか。トクヨは昭和16年4月6日午後、講堂で在校生に訓話の後、講堂から帰る途中の廊下で激痛のためにうずくまった。直ちに入院したが、すでに手遅れで昭和16年7月17日死をむかえた。トクヨの入院中、後継者二階堂美喜子（1919-1949）²⁵⁾によるトクヨ口述の膨大な量の記録「病床日記」（日本女子体育大学所蔵）にも、これからの体操科についてのトクヨの考えは残されていない。

新理事長美喜子は昭和17年4月20日例年のように教員名簿を文部省に提出した。しかし、1ヶ月後の昭和17年5月20日に理事長美喜子は、高田せい子と石井小浪²⁶⁾の解任報告を提出している。芸術舞踊の教師たち

が解任を希望したとは考えられない。戦時下の体操科の統一をはかる文部省の強い圧力があったと思われる。

トクヨは体操塾創設以来ダンスにおいては、自己の研究と信念にもとづき学校体操教授要目とは異なる独自の指導方針をとってきた。しかも、各地に就職した卒業生たちは、ダンス指導において指導者のリーダー的存在として好成績を上げているのを聞くにつけ、トクヨは自分の指導方針に大いに自信をもっていただけ。もし、二人のダンス教師解任の時、トクヨが生存していたならば、自己の信念を貫くために文部省と戦ったであろうか。

V. ま と め

トクヨは体専の早期からダンスを重視した指導方針をとり、二人の一流の舞踊家、高田せい子と石井小浪を教師として採用した。せい子のバレエ・テクニックの指導は体づくりを念頭においた指導であった。また、小浪は学校舞踊を指導した。芸術的な小浪の作品は上級生から下級生へと長い間踊り継がれた。

二人のダンス教師は約10年間体専で教えたが、昭和17年文部省の圧力によって体専を解任された。

VI. 注および引用文献

- 1) 大正初年代中頃から民間の舞踊研究が盛んになり、子どもの生活や情感に即応した作品を考案するようになった。民間舞踊家たちは学校で教えている遊戯に対して彼らが創案した作品を「舞踊」と呼んで区別した。例えば、童謡舞踊、学校舞踊、児童舞踊、教育舞踊など
- 2) せい子が東京音楽学校に入学した明治45年に同校を卒業。世界的な声楽家三浦環のあとを引き継いで帝劇のスターとなる。昭和6年原信子歌劇団を創設、浅草オペラで活躍。イタリアやニューヨークでもステージに立ち、日本人として初めてミラノのスカラ座専属ソプラノ歌手となった。昭和9年帰国、原信子歌劇研究所を主宰して後進の育成につとめた
- 3) 1912年(大正元年)10月来日、帝劇歌劇部でバレエを教える。1916年夏歌劇部は解散、自ら劇場ローヤル館を開場してオペレッタの上演を続けた。1918年経営難から劇場を閉鎖してカリフォルニアに渡り、再び日本を訪れることはなかった
- 4) 高田せい子 1935 舞踊教師としての私：高田せい子 舞踊パンフレット p.34
- 5) アメリカのカリフォルニアに生まれる。バレエの技法によらず、自己の内面を自由に表現したダンカンのダンスは、ヨーロッパで認められた。ドイツやロシアに学校を創設、子どもたちにダンスを教える。1927年フランスのニースで悲劇的な事故死をとげる。現在では、アメリカン・モダンダンスのパイオニアとして称えられている。せい子がダンカンの舞台を観たのは、第4回目のアメリカ公演のときで、せい子はこの時三回も観に行った
- 6) 高田せい子 1932 ダンカンに感激：音楽新聞 p.5
- 7) 前掲4) p.35
- 8) コーカサス・チフリスに生まれる。ペテルブルグ皇室舞踊学校でバレエを学ぶ。マリンスキー劇場のバレリーナに選抜される。ロシア革命(1917)により、1919年日本(神戸)に亡命。1920年横浜へ移住。1928年鎌倉七里ヶ浜にバレエスクールを創設。多数の門下生を育てる。1931年日本に帰化、霧島エリ子と名乗る。1941年中南支の日本兵士慰問先で病没
- 9) 原田鈴子 1975 飛弾の禪寺に嫁したある女人の記録：すずかけの道 p.232 五柳舎 埼玉県大宮
- 10) 同上 p.232
- 11) せい子の作品リストにはこれらの作品は無い。外国文化のバレエを教えているので、このような軍歌を予定に載せねばならない社会情勢であったと考えられる
- 12) 吉田和子・斉藤久子(昭和16年12月、本科卒)への電話によるインタビュー(平成19年6月)
- 13) 九州の富豪の家に生まれる。東京の文化学院へ通うかわら、昭和10年より有楽町にあった蚕糸会館のスタジオでエリアナ・パヴロワからバレエを学ぶ。昭和13年歌舞伎座で第一回舞踊公演会を開きバレエ界に華やかにデビューした。その後第二回(昭和14年)、第3回(昭和15年)と歌舞伎座で公演会を開き、バレエ界での地位を揺るぎないものとした。文部省の報告には八百子が体専で教えたという記録はないが、昭和15年および昭和16年頃の卒業生は指導を受けたことを憶えている
- 14) 大正中期から詩人や音楽家たちが文部省唱歌を批判し、子どもの生活や情感を考えて作詞や作曲をする童謡運動を展開した。その運動に舞踊家たちも賛同して童謡に振り付け童謡舞踊(童謡)と称した
- 15) 石井小浪 1932 石井小浪学校舞踊 p.3 小學館 東京
- 16) 最初に「学校舞踊」という語をとらえたのは誰か不明。日本で考案された言葉であるからアメリカには School Dance という語はない
- 17) 同上 p.3
- 18) 同上 p.3
- 19) 二階堂トクヨ 1922 見えすいて心細い：わがちから 第三巻：p.10
- 20) 前掲15) 序 p.3
- 21) 戸倉ハルおよび江口隆哉も「月の砂漠」を振付けているが、伝統ダンスの「月の砂漠」は小浪の作品であった
- 22) 石井 歡 1994 舞踊詩人 石井 漠 p.232 未来社 東京
- 23) 日本体育學會 1936 昭和11年学校体操教授要目の改正方針と要點並其運用 p.135
- 24) 近藤有宜他編 1977 児童舞踊70年史 p.76 全日本

児童舞踊協会

- 25) トクヨの妹村田とみの次女、昭和16年日本女子大学校家政科卒業、岩佐高等女学校に就職するがトクヨ病のため退任、トクヨの養女（昭和16年4月24日届出）となる
- 26) 小浪の助手蔦原マサヲ（体操塾大正15年卒）も共に解任されている

（平成19年9月10日受付）
（平成19年12月4日受理）